

## 研究論文

## 初妊婦夫婦の育児経験の実態と夫の育児への期待と希望

—初妊婦夫婦への質問紙調査から—

笹木 葉子

(2013年12月25日受稿)

**抄録：** 本研究は、初妊婦夫婦の育児経験の現状と妊婦が夫に期待し夫が希望する育児内容を明らかにする事により、妊娠期からの育児準備支援の示唆を得る事を目的とした。育児セミナーに参加し、質問紙調査に同意を得た妊婦夫婦 174 組 348 名を対象として調査した結果、育児経験率は、妊婦 24.7%、夫 14.9%と低かった。夫婦ペアでは、夫婦とも経験があるのは 9 組 (5.2%)、どちらか経験があるのは 51 組 (29.3%)、夫婦とも経験がない夫婦は 114 組 (65.5%) で、有意 ( $p < .001$ ) に育児経験のない夫婦が多かった。夫の育児支援について、妊婦が夫へ期待する率と夫が希望する率はどちらも 82.2%～95.4%で、夫婦間の希望と期待の認知は一致していた。育児内容別では、夫婦共に 90%以上の項目に沐浴があげられ、育児教室等の体験が育児のイメージ化につながっているものと考えられた。オムツ交換 ( $P < .01$ )、あやすこと ( $P < .05$ ) は、育児経験のある夫の希望率が有意に高く、経験が必要な項目であることが窺われた。育児経験の少ない現代の初妊婦夫婦には、育児教室等で育児技術経験を取り入れ、育児のイメージ化を図るような支援が有効である事が示唆された。

## I. はじめに

我が国の2012(平成24)年の出生数は103万7231人で、前年の105万806人より1万3575人減少し、出生率は8.2で前年の8.3を下回った。出生数と死亡数の差である自然増減数率は、-1.7で6年連続出生数が死亡数を下回る状況である<sup>1, 2)</sup>。合計特殊出生率は、2005(平成17)年に1.26と過去最低を更新して以降、微増と横ばいを繰り返し、2010(平成22)年1.39、2012(平成24年)1.41とやや上昇したが、依然として低い水準で<sup>1)</sup>、長期的な少子化の傾向は40年近く経過している。2012(平成25)年の第1子出産平均年齢は30.3歳<sup>2)</sup>で、現代子育てをしている世代背景は、1980年(昭和55年)前後に出生し、少子化と急激なインターネットの普及が進行し始めた中で生まれ育った世代である。つまり、幼い子どもとの関わりや、育児の様子等、子育てを見聞きする経験が乏しく、

頼りの母親や祖母の生活様式や育児法は、文化的背景の激変によりロールモデルとなりにくく、子育てが伝承されにくい現状が容易に推察される。このような背景の中、国の施策も少子化対策から、子ども・子育て支援に変換し<sup>3)</sup>、子育てを母親の身近でサポートできる父親に求められる役割も、育児そのものに変化してきている。1999年以降、少子化対策においても、男性の育児への責任意識や子育てへの参加の必要性が取り上げられている<sup>4)</sup>。2010年に、子育てを楽しむ自分自身も成長する男性、「イクメン」が流行語になり、厚生労働省の推奨のもと、参加型の公式サイトやハンドブックの配付等イクメンプロジェクトが立ちあがった。このプロジェクトは、男性が育児をより積極的に楽しみ、育児休業を取得しやすい社会の実現を目指しており、育児世代に浸透してきている<sup>5, 6)</sup>。実際にスーパーマーケットや百貨店で、

子ども連れの父親が、独りでオムツ交換やミルクを飲ませている光景や、保育園にスーツ姿に抱っこホルダーで送迎する姿も違和感なく受け入れられるようになってきている。それを裏付けるように、20歳以上の男女2000人規模の「父親の育児参加に関する世論調査」(3年連続調査)では、父親の育児参加について「積極的に参加すべき」と「時間の許す範囲で育児に参加する」を含めると9割以上の男女が父親の育児参加に肯定的で、年々増加傾向にある。また子育て中の男女ともに8割が、父親は育児していると認知していると報告されている<sup>7)</sup>。このように夫婦の育児役割に垣根がなくなりつつある現状の中で、育児を始める前の初妊婦とその夫に対する育児準備の支援が重要と考えられるが、妊娠期の育児準備支援についての先行研究は少ない。そこで現代の初妊婦夫婦がどれくらいの育児経験を持ち、夫はどのような育児をしようと考えているのかを明らかにし、妊娠期からの育児技術準備を支援する具体的育児項目への示唆を得る事を目的として調査した。

## II. 研究目的

育児を実践する前の初妊婦とその夫の育児経験の有無と妊婦が期待し夫が希望する育児について明らかにし、妊娠期からの育児準備支援をするための具体的育児支援内容の示唆を得る。

## III. 研究方法

### 1. 調査対象

大都市及び中堅都市において、公益財団法人が主催したプレママパパクラスに希望参加した妊婦とその夫で、調査協力を承諾し有効回答を得られた174組348名(有効回答率91.6%)である。

### 2. 調査期間

2011年2月～2011年10月

### 3. 調査方法と調査内容

#### 1) 調査方法

自記式質問紙において、多項選択法で求めたデータを、集計記述しExcel2010およびPASW

Statistics18にて分析した。

#### 2) 調査内容

##### ①妊婦とその夫の属性

妊婦と夫の年齢、妊婦と夫の職業、妊婦の妊娠週数

##### ②質問内容

育児経験の有無

育児する人

夫に期待する育児内容(妊婦)

夫が希望する育児内容(夫)

## 4. 倫理的配慮

対象者へと依頼文書と調査票を配布し、研究目的、個人情報管理について文書と口頭で説明し同意を得た。

- ・調査への参加は自由意志であり参加の是非により本日のセミナーへの不利益はない事。
- ・調査票は無記とし、得られたデータは数値化して分析、終了後は速やかに破棄する事。
- ・同意した場合のみ調査票に記入し、回収箱にて回収する事により同意を得たものとする事
- ・結果は学術的目的以外では発表しない事。

なお、本研究は、北海道文教大学教育と研究に関する倫理審査委員会の承認を得ている(承認番号:25004)

## IV. 結果

### 1. 基本的属性

妊婦の年齢は19歳～42歳で、平均年齢は32.0±4.4歳であった。夫の年齢は22歳～48歳で、平均年齢33.6±5.5歳であった。

妊婦の妊娠週数は8週～37週で、平均妊娠週数は平均週数24.5±7.0週、平均月齢は6.8±1.8ヶ月であった。

妊婦の職業は、無職91名(52.3%)、有職83名(47.7%)で、その内訳は、会社員57名(32.8%)、公務員5名(2.9%)、派遣社員・パート12名(6.9%)、自営業4名(2.3%)、学生2名(1.1%)、その他3名(1.7%)であった。

夫の職業は、会社員152名 (87.4%)、公務員12名 (6.9%)、自営業5名 (2.9%)、学生2名 (1.1%)、その他3名 (1.7%) であった。

家族形態は、夫婦の核族世帯が世帯 (%) で、同居世帯は13世帯 (7.5%) で、同居人数1名は10世帯 (5.7%)、2名は3世帯 (1.7%) で内訳は、実母のみ4世帯 (2.3%)、実母のみ5世帯 (2.9%) 義父母3世帯 (1.7%) その他詳細不明1世帯 (0.6%) であった。

妊婦の職業の有無により属性の差を  $\chi^2$  検定により比較したが、妊婦の年齢、妊娠週数・月齢・時期、職業の有無、同居人数に有意な差はなかった。

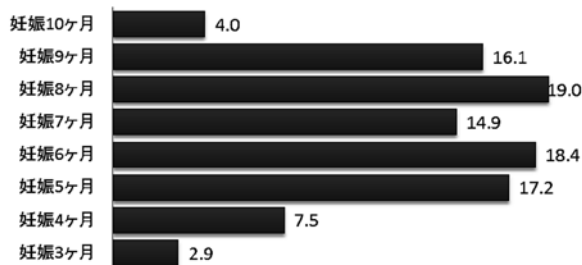


図1 妊娠月齢別割合 (%) n=174

属性	平均値	S D
妊婦の年齢	32.0	4.4
夫年齢	33.6	5.5
妊娠週数	24.5	7.0
月齢別	6.8	1.8

職業	妊婦 名 (%)	夫 名 (%)
無職	91 (52.3)	0 (0)
会社員	57 (32.8)	152 (87.4)
自営業	4 (2.3)	5 (2.9)
公務員	5 (2.9)	12 (6.9)
パート	12 (6.9)	0 (0)
学生	2 (1.1)	2 (1.1)
その他	3 (1.7)	3 (1.7)

## 2. 赤ちゃんの世話 (育児) 経験の実態

赤ちゃんの世話経験 (以後育児経験) の有無について、夫婦共に回答のあった174組の結果を「よくある・ある」をある群、「あまりない・ない」をない群にまとめて集計した結果、育児経験がある妊婦は43名 (24.7%)、育児経験のない妊婦131名 (75.3%) で、有意 ( $\chi^2 (1) = 85.54, P < .001$ ) に経験のない妊婦が多かった。育児経験のある夫は26名 (14.9%)、育児経験のない夫は148名 (85.1%) で、有意 ( $\chi^2 (1) = 44.51, P < .001$ ) に育児経験のない夫が多かった。妊婦と夫の育児経験率に有意な差は見られなかった。

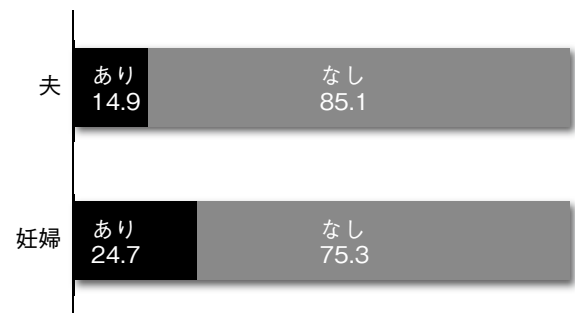


図2 夫婦の育児経験の有無 (%) n=174

た。夫婦ペアの育児経験率をしてみると、妊婦と夫が共に育児経験がある夫婦は9組 (5.2%)、妊婦と夫がともに育児経験がない夫婦は114組 (65.4%)、妊婦に育児経験があり、夫に育児経験のない夫婦は34組 (19.5%)、妊婦に育児経験がなく夫に育児経験がある夫婦は17組 (9.8%) であった。夫婦ペアの育児経験率の差をMcNemar検定により分析した結果、夫婦間では、妊婦の方が有意 ( $\chi^2 (1) = 5.67, P < .05$ ) に育児経験率が高かった。

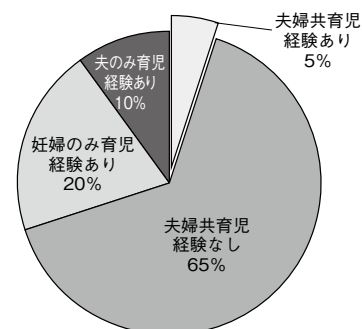


図3 夫婦の育児経験の有無 n=174組

### 3. 妊婦が期待する育児と夫の育児の希望

夫の育児について、妊婦の回答は、夫に育児を期待するは174名(100%)で、夫は育児の希望あり173名99.4%、希望なし1名(0.6%)であった。育児の内容では、沐浴への妊婦の期待は166名(95.4%)、夫の希望は164名(94.3%)、妊婦の抱っこへの期待は143名(82.2%)、夫の希望は157名(90.2%)、妊婦のオムツ交換への期待は149名(85.6%)、夫の希望は148名(85.1%)、妊婦のあやす期待152名(87.4%)、夫の希望は143名(82.2%)、妊婦のその他13名(7.5%)で、その内訳は、育児全てをする6名、遊ぶこと2名(1.2%)、寝かしつけ、教育が各1名(0.6%)、夫のその他は6名(3.4%)で、その内訳は、育児全



図4 沐浴 妊婦の期待と夫の希望 (%) n=174



図5 抱っこ 妊婦の期待と夫の希望 (%) n=174



図6 オムツ交換 妊婦の期待と夫の希望 (%) n=174

てをする5名(28.7%)、ごはん・ミルクを与える1名(0.6%)であった。

夫の育児経験の有無と妊婦が夫に期待する育児について、夫婦ペアの回答をMcNemar検定により比較した結果、抱っこについて夫の方が多い傾向がみられたものの、いずれの育児項目にも有意差はなかった。夫の育児経験の有無と夫の育児希望の有無の比較では、オムツ交換 ( $\chi^2(1) = 5.37, p < .05$ ) とあやす事 ( $\chi^2(1) = 4.07, p < .05$ ) において、育児経験がある夫が育児経験のない夫に比較して有意に希望率が高かった。

妊娠週数を前期、中期、末期に分類し、妊娠時期による夫の育児希望の差については、いずれの妊娠期にも差はみられなかった。また妊婦の夫への育児期待にも妊娠時期による違いはなかった。妊婦の職業の有無と夫への育児期待および夫の希望については、妊婦の期待において、あやすが有意に ( $\chi^2(1) = 4.10, P < .05$ ) 期待率が高かったが、夫の希望率に差はなかった。

夫の育児希望と妊婦の育児期待との夫婦間の差をMcNemar検定にて求めた結果、いずれも有意な差はみられなかった。

### 4. 育児に関わる人

出産後に育児に関わる人について、妊婦は、自分170名(97%)、夫94名(53.7%)、実母34名(19.4%)、義母8名(4.6%)、姉妹3名(1.7%)と回答した。夫は自分124名(70.9%)、妊婦101名(57.7%)、妻の母4名(2.3%)、夫の母4名(2.3%)と回答した。

妊婦は、妊婦の育児経験の有無によって育児に関わる人の選択に差はあったが、育児経験のある



図7 あやす 妊婦の期待と夫の希望 (%) n=174

夫は、有意に妊婦 ( $\chi^2(1) = 6.48, p < .05$ ) と妊婦の母親 ( $\chi^2(1) = 6.45, p < .05$ ) を選択していた。

表3 育児に関わる人 n=174

職業	妊婦 名 (%)	夫 名 (%)
妊婦	170 (97.1)	101 (57.7)
夫	94 (53.7)	124 (70.9)
実母	34 (19.4)	15 (8.6)
義母	8 (4.6)	4 (2.3)
その他	3 (1.7)	4 (2.3)
学生	2 (1.1)	2 (1.1)
その他	3 (1.7)	3 (1.7)

## V. 考 察

この調査の対象妊婦の平均年齢は32.0±4.4歳で、約7割が30～39歳で、2012(平成25)年の第1子出産平均年齢30.3歳<sup>2)</sup>より1.7歳高い。また、家族形態は、9割以上が夫婦2人の核家族であり、調査地域の大都市中堅都市の影響が表れている。妊婦の妊娠週数については8週～37週で、平均妊娠週数は平均週数24、5±7.0週、平均月齢は6.8±1.8ヶ月で、妊娠中期～末期が9割を占めており、ほとんどが安定期の妊婦であった。また、妊婦の職業は、有職者、無職者がほぼ半数で偏りはなかった。また、任意参加の育児セミナーに応募して受講していることから、妊娠・育児に対して意識の高い対象と推察される。

そのような背景の中でも、育児経験のある妊婦は、妊婦全体の約4分の1以下、夫は全体の6分の1以下と低い経験率であった。初妊婦の多くは、育児経験がない状態で育児期に入ることがわかった。また夫婦単位でも、夫婦ともに育児経験があるのは1割にも満たず、夫婦一方でも経験があるものを含めても3割強の経験率で、育児期に入ってから育児困難や不安に陥る状況が容易に推察できる結果であった。このように育児経験が極端に少ない現状では、夫婦間での協力や理解が重要になる。そこで、妊婦は、夫にどのような育児を期待し、夫はどのような育児を希望しているのか、夫婦間の思いの一致度を確認したところ、

妊婦全員が夫の育児を期待し、夫もほぼ全員が育児を希望しており、育児は夫婦で行うものであるとの認識が一致していることが確認された。

妊婦の育児内容別の期待率では、沐浴、抱っこ、おむつ交換、あやす各項目とも、8割以上の期待率で、特に沐浴はほとんどの妊婦が期待しており、夫への期待の高さが窺われた。また、夫の育児の希望内容も妊婦と同様に、沐浴、抱っこ、おむつ交換、あやす等すべての項目で8割以上の希望率で、沐浴と抱っこの希望率は9割を超えていた。その他の項目に回答した妊婦の6名、夫の6名は、育児全てをしてほしい、したいとの意見であり、意欲の高さが窺われた。夫婦単位で、育児の期待と希望についてみると、抱っこについて夫の希望が多い傾向にあるものの、どの項目も夫婦間で有意な差はなく、期待と希望はほぼ一致していた。このように、夫婦ともに夫の参加する育児項目において期待と意欲があり、育児は夫婦双方の役割であるという意識の表れであると考えられる。

次に、夫の育児経験が育児希望にどのように影響するかを見てみると、オムツ交換とあやすにおいて、育児経験がある夫の希望率が有意に高かった。これは、オムツ交換は、排泄に関連し、育児経験のない夫には敬遠される技術であり、あやすことについては、言葉を話さない児に対する関わりと、泣きへの対応ととらえることができ、これも技術を要するため、育児経験のある夫の希望が高くなったと考えられる。しかし、更衣やおむつ交換、体を洗う等、様々な技術の要素が入っている沐浴については、ほとんどの夫が希望していた。これは、両親学級や育児セミナー等で、「沐浴は父親に期待されている」と伝えられ、体験をしている夫も多いことから、夫のすべき育児としてのイメージができていないからではないかと考えられ、育児の知識や経験は、育児意欲に影響することが推察される。

父親の育児参加に関する世論調査では、育児期の父親の4人に3人が、風呂に入れたり、遊び相

手をしており<sup>7)</sup>、就学前の子を持つ親の調査でも、お風呂に入れたり、室内外で遊び、寝かしつけもしており、自分は子どもの相手をよくしていると、半数の父親が自己評価している<sup>8)</sup>。という結果であり、現代の父親は、多くの育児に参加している事がわかる。

このような父親の育児参加の実態と、本調査の夫の育児参加希望の状況は同じで、妊娠期の夫の育児への意欲が、そのまま育児期の実践につながっている可能性が推測される。つまり、妊娠期の夫への育児支援が、出産後育児することの動機に影響を与えることが考えられる。

次に、夫の育児経験の有無によって、育児項目の期待度が変化するかを見てみたが、いずれの育児項目にも有意な差はみられず、妊婦は、夫の育児経験の有無に関わらず、夫の育児を期待していることがわかった。また、妊娠時期によって、夫の育児への希望に変化がないか見てみたが、妊娠時期による育児の希望に有意な差は見られず、妊娠期どの時期からでも夫への育児技術支援は有効であると考えられる。

妊婦の職業の有無と夫の育児への期待と夫の希望については、夫婦間ではほとんど差がなかったが、有職の妊婦が、あやす事に対して有意に期待率が高かった。職業と家事や育児の3役をこなす可能性が高い有職の妊婦にとって、復職した時に、あやしてくれている間に家事などができるので、納得できる結果であった。このことから、夫の育児準備支援に、子どものあやし方や遊び方についての項目も加える必要性が示唆された。妊娠期の育児技術準備支援には、育児期の父親の育児実践内容も取り入れて、お風呂の入れ方、抱っここの仕方、オムツ交換の仕方、遊び方、あやし方、寝かしつけ方などの項目が必要であると考えられ、これにより、育児への惑いや母親への育児負担の軽減になると考えられる。

出産後に育児に関わる人については、妊婦のほとんどが自分と答え、夫については半数で、夫への育児の期待は大きいものの、育児の主体は自分

であると認識している様子が窺える。一方夫は、7割が自分と答え、妊婦については6割と、育児は夫が主体ではなく、妻とともにやるものという意識であることが窺われた。また夫婦以外に育児に関わる人については、妊婦は、実母が2割弱、義母は1割未満で、夫は、妻の母と夫の母が同割合でごく少数であった。また、夫の育児経験が援助者の選択に影響があるかを見てみると、育児経験のある夫が、妊婦と妊婦の母親を有意に選択していた。これは、育児経験があることで、育児の大変さをイメージし、妊婦と妊婦の母親の力を必要としているものと考えられる。育児中の夫婦への調査<sup>9)</sup>では、育児の手助けは夫が一番多く、実母が7割、義母が5割であり、子育ての悩みについて頼りになった人は、実母が一番多い。しかし今回の調査では、実母や義母の選択は僅かであった。これは、妊娠期の母親像と父親像の認識についての調査から、自分の親像は、優しい、頼れるなど、感じや思いがそのイメージであることが多く、<sup>10)</sup>育児の大変さを想像し、援助者の必要性を感じることは難しい。そのため、育児経験の乏しい中でも、夫婦で協力すれば夫婦のみで育児できると判断し、夫婦以外の選択肢が少なかった事が窺われる。このことから、育児準備支援のためには、妊娠期から育児をイメージできるように、育児技術の実践による支援とともに、育児生活の具体的な内容やそのために必要な育児の援助者の必要性など、情理的支援も重要であることがわかる。

また、妊娠期の夫の行為に対する満足度尺度では、「育児をイメージして真似をしてくれた」、「両親学級に参加してくれた」、「育児用品を一緒に選んでくれた」などが、妊婦の夫への満足度に影響する項目としてあげられ<sup>11)</sup>、夫が育児に積極的に関わる事は、夫婦関係の満足に関わる<sup>12)</sup>と述べられている。妊娠期には、育児技術の練習や両親学級の参加や育児への関わり、育児期には、積極的な育児の実践が、妻の満足度を上げ、夫婦関係の良否にも影響する<sup>12)</sup>。このように、妊娠期の育児準備支援は、将来の夫婦関係を良好に保つこと

にも貢献できるものと考えられる。

夫婦の家事分担についての調査<sup>13)</sup>では、7割近くの女性が自分の家事分担の割合が多く不公平だと思ひ、子どもを持つことへの負担感も強い傾向があると述べられ、父親の子育てと家族のあり方についての調査<sup>14)</sup>でも、子育てを夫婦同じに分担している女性は子育ての負担感が少なく、子どもをもつことをよりプラスに評価していると述べている。このことから、育児期には家事も育児も夫婦で同じように分担することで、母親の育児負担感を低下させるため、妊娠期から家事育児分担の必要性についての情報を伝える事は、育児の情動的支援に大切な内容であると考えられる。また、夫が、育児参加できない理由の多くは、仕事に追われて時間がないことと同時に、育児の仕方がわからない、父親の育児を後押しする行政支援が少ないとの意見も聞かれ<sup>7)</sup>、ワークライフバランスの調整と並行して、夫への育児技術準備への情動的支援と実践的な育児技術支援の両方が必要であることが確認できた。

以上のことから、本調査で得られた、結果と、出産後の育児実態の先行調査を参考に、育児技術支援の内容と情動的支援の項目をまとめると、育児技術支援の内容は、沐浴を中心に、抱っこ、オムツ交換、あやし方、遊び方、寝かしつけ方などについての実践があげられる。また、情動的支援では、1日の育児の生活のスケジュールや、大人の思い通りにならない日常など、育児生活を具体的にシミュレーション出来る内容を伝え、育児の援助者の予定を立てるなど視野を広げられる内容が必要である。

本調査の結果は、育児セミナーに応募して参加した、育児への意欲が高く、やや平均年齢の高い対象に、都市化の進んだ地域で行った調査であったことから、一般化するには、郡部の地域や若い世代など、広く対象を広げて調査する事が必要であると思われる。

## VI. まとめ

夫への育児準備支援は、妊娠期から夫が育児の知識と、育児技術の練習をしておくことで、育児に積極的に関わる自信と、意欲を持ち続け、育児期に夫婦で協力して育児していけることが目的である。それを果たすために、初妊婦夫婦の育児経験の実態と夫婦間の夫への育児の期待と夫の育児の希望について調査した結果と支援の方向性を以下にまとめる。

### 《調査結果の概要》

- ・育児経験率は夫婦とも非常に低く、夫婦単位でも、両方または一方が育児経験のある夫婦は3割程度である。
- ・夫の育児への妊婦の期待と夫の希望は、沐浴、抱っこ、オムツ交換、あやすなど全ての項目が8割以上である。
- ・夫の育児について、妊婦の夫への期待と夫の希望は一致しており、育児意欲は高い。
- ・有職の妊婦は、夫に対してあやすことの期待が高い。
- ・育児生活のイメージがつかないため、夫婦のみで育児する意向の夫婦がほとんどで、育児の援助者の選択は少ない。
- ・妊娠時期による夫の育児希望に差はない。

### 《育児準備支援の方向性》

- ・支援は妊娠期全期にかけて有効である。
- ・育児技術支援の内容は、沐浴を中心に、抱っこの仕方、オムツ交換の仕方、あやし方、遊び方、寝かしつけ方などについて実践を中心に行う。
- ・育児の情動的支援は、出産後の生活をシミュレーション出来るように、1日の流れに沿って、より具体的な内容にする。
- ・育児に対する、夫への期待も夫の希望も高いため、育児分担や協力の仕方など、実践的支援が有効で、夫婦関係にも効果的に働きかけられることが期待できる。

## 謝 辞

本調査にご協力いただいた、初妊婦ご夫婦、および、セミナーを主催した公益財団法人の川村尚子事務局長、越智さんに深謝いたします。

## 文 献

- 1) 厚生労働省「人口動態統計」平成24年(2012)人口動態統計の概況(概要)  
[http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei12/dl/02\\_kek.pdf](http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei12/dl/02_kek.pdf)
- 2) 厚生労働省編：平成25年版厚生労働白書。東京，日経印刷，2013。
- 3) 厚生労働省編：平成24年版厚生労働白書。308-312，東京，日経印刷，2013。
- 4) 内閣府男女共同参画編：男女共同参画白書平成25年版。80-89，東京，新高速印刷，2013。
- 5) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局委託事業「イクメンプロジェクト」  
<http://ikumen-project.jp/index.html>
- 6) 内閣府編：平成25年版少子化社会対策白書。44-52，東京，勝美印刷，2013。
- 7) 一般社団法人中央調査社：父親の育児参加に関する世論調査中央調査報NO. 646，2012  
<http://www.crs.or.jp/backno/No659/6592.htm>
- 8) 汐見稔幸，大日向雅美，一見真理子，福丸由佳監修：後藤憲子，高岡純子，持田聖子：第2回乳幼児の父親についての調査報告書。東京，ベネッセ教育総合研究所報。VOL7，2011。
- 9) 明治安田生活福祉研究所 第7回 結婚・出産に関する調査 2013  
[http://www.myilw.co.jp/life/enquete/07\\_marriage.html](http://www.myilw.co.jp/life/enquete/07_marriage.html)
- 10) 笹木葉子，村田垂紀子：初妊婦の母親像とその夫の父親像—質問紙の自由回答から—。北海道文教大学紀要，37：169-176，2013。
- 11) 中島久美子，行田智子：妊婦が認知する夫の行為満足度尺度の作成。母性衛生，50(1)

49-56，2009。

- 12) 橘智恵，中村絵里子，中島夕美，石田貞代，萩原結花：夫の育児家事行動の特徴と子どもへの愛着，夫婦関係満足度との関連。母性衛生，49(1)：65-73，2008。
- 13) 小林利行：「結婚」や「家事分担」に関する男女の意識の違い～ISSP国際比較調査(家庭と男女の役割)・日本の結果から～。放送研究と調査，63(4)：44-57，2013。
- 14) 諸藤絵美：父親の子育て参加と家族のあり方。放送研究と調査，56(3)：56-63，2006。



## Realities of Child-Care Experiences of First-Time Parents, and Expectations and Hopes for Husbands' Contribution to Childcare :

Based on a Questionnaire Completed by First-Time Parents

SASAKI Yoko

**Abstract:** This study was conducted to gain insights into providing assistance for child-care preparation beginning during pregnancy. This was done by elucidating the realities of child-care experiences of first-time parents, as well as the child-care duties that expecting mothers anticipate from their husbands and those that the husbands wish to perform. Results of a survey of 174 couples (348 participants) who participated in the child-care seminars and agreed to complete the questionnaire showed that the overall level of child-care experience was low, with 24.7% of wives and 14.9% of husbands reporting such experience. In 9 couples (5.2%) both parties had child-care experience, in 51 couples (29.3%) only one party had such an experience, and in 114 couples (65.5%) neither party had any experience. Thus, there were significantly more couples in which neither party had any experience ( $p < .001$ ). The percentage of child-care support that the expecting mothers anticipated from their husbands and the amount that the husbands wished to provide were both between 82.2% and 95.4%, respectively, showing congruency of the hopes and expectations between the husbands and wives. Turning to specific child-care duties, over 90% of both the husbands and wives selected bathing the child. This result is believed to reflect the experience of child-care classes that led the couples to visualize caring for a child. The proportion wanting duties such as changing diapers ( $p < .01$ ) and cradling infants ( $p < .05$ ) were significantly higher among the husbands with child-care experience than among those without, suggesting that these items require experience. Based on the above findings, it was suggested that assistance that aids couples to visualize child-care by incorporating experiences of child-care skills in child-care classes is effective for modern couples expecting their first child and lacking child-care experience.

